

木村泰子先生講演会

「大空小学校は、子どもが自分で作る自分の学校です」

8月31日、なんなん広場大会議室で、大空小学校の元校長木村泰子先生の講演会を開催することができました（主催 中信地区こころをつなぐ不登校ひきこもりネットワーク）。

演題は「すべての子どもの学習権を保障する学校づくり」。午前中に観た「みんなの学校」に出ていた子どもたちの「その後」（もう、24、5歳にもなる）が中心でしたが、子どもたちの具体を語りながら（先生は、話しながら心の中で涙を流していたなあ）時々挟まれる先生の言葉は、自分たちの常識の非常識を、厳しく問うものでした。

学校は、「子ども自身が自分で作る自分の学校です」「すべての子どもたちが、学び合う場」です/「すべての子どもは信頼できる生き物です」/「見えるところしか見えない大人に、子どもたちは疎外されています」/「発達障害の定義は何ですか、アメリカにこんな言葉はありません」/「薬を飲む前に、学校という環境を調整することです」

当日は、台風10号の真ただ中、大阪も豪雨とのことで、先生のご自宅からのリモート講演となりましたが、目の前に木村先生がいないことを全く感じさせない迫力のある先生の話に、100名を超える来場者みんなが圧倒され魅了された3時間でした。

「箇条書きでは本質に迫ることはできない」と言われたことを思い出して、まさに、これではダメだなあと思いつつ、時間に迫られたことを言い訳にした、以下感想4つです。

1つは、子どもが持っている力について、です。

子どもたちは、困難をかかえ苦しい最中であっても、本当にけなげに自分のことも他人のことも、よく考えていました（「自分が元の学校に戻ると、父さんと母さんのよりが戻ると思った」「ぼくは、担任の先生も、生徒指導の先生も、誰も恨んでいない」）。

そして、自分の苦しみや悩み、心の葛藤を言葉にして、とても「よく」話すことができる、その語る力には、驚くべきものがありました。

そして、そういう言葉の力、思う力によって、彼らはたくましく成長しています。

先生の語る子どもたちの姿に感動しながら、その力は、子ども自身が本来持っているものであることと共に、「みんなの学校」が子どもたちに保障した「自分が自分で決めて自分で実行する」という先生の言われる「学びの自由」によってこそ、可能だったことがわかります。「あるべき」学校の姿を目の当たりにした思いでした。

2つ、木村先生が、あんなに「ずけずけと」子どもの心に踏み込んでも、結局子どもたちは先生のところに帰って来て、先生に「話す」のは何故かということです。

それは、木村先生が、子どもたちから全幅の信頼を得ているからでしょうが、「信頼される」ために1番大切なことは、相手を「信頼する」ことだということを、先生は教えてくれたように思います。

「すべての子どもは信頼できる生き物です」と先生は断言されましたが、信頼するからこそ、信頼されるのです。

この1点において、先生の話に感動することはできても、多くの者は木村先生になれないのだと、(とりわけ自らを省みながら)思いました。

3つ、木村先生について、です。

先生の教育論は、子どもたちの心と身体から立ち上がっているものであり、世に横行する凡百の理屈だけの教育論とは全く異なるものでした。

そこでは、ドキッドキッと、子どもたちの鼓動が聞こえ、温かな体温が伝わってきます。

「子どもの事実から、『人権』の視点から、不登校を問い直すことが必要だ」と、先生はまとめられました。その「人権」を、自分は「いのち」と言い換えてもいいと思いました。

木村泰子先生は、あらゆる属性を棄てて、裸形の「いのち」で、子どもたちの「いのち」と向き合っています。

学校を変えるのには、「ヒエラルキー」「同調圧力」「前例踏襲」を棄てるという先生が、それを果たし、子どもの「いのち」と向き合うまでの過程には、どれほどの厳しい闘いがあったことか、自分はその苦難(対自分、対大人、対社会等々)を思いました。

現在の境地に達するまでの先生の道の険しさを、たとえ100分の1であったとしても覚悟しなければ、先生の講演を聴いたことにはならないと、強く思われました。

4つ、現在の教育政策についてです。

今の教育改革の方法はベクトルが全く逆だと、かねがね思っていました。たとえば、不登校対策も、不登校の子どもに焦点を当てるような「不登校対策」は違うのではないか、「学校」そのものをこそ、対象とすべきではないか、等々。

だから、先生の最後の言葉は、とても嬉しかったです。

〈不登校の子どもたちのための特別な学校ができたり、フリースクールのような居場所がたくさんできて、子どもたちの受け皿が多くあることに反対はしない。しかし、なにより大切なことは、現在の学校が、「すべての子どもの学習権を保障する」学校に変わっていくことだ〉

先生のお墨付きをもらって、少し勇気が湧きました。

9月1日、昨日のことを思い出していると、こんな「かもしれない」も(ヨシタケシンスケに倣って)ブカブカと心に浮かんできました。そんな、「かもしれない」のいくつか。

- ・木村先生は、先生たちを「教員」と言って、「教師」と言わない(自分もまた、ある時からこの言葉が嫌いになった)。こんな言葉の使い方ひとつにも、先生の学校観は出でいるのかもしれない。
- ・映画の後、ある先生は「これが普通の学校ですね」と言われた。木村先生は、大空小学校は「普通を棄てたら普通の学校になった」と言う。

- 「みんなの学校」を「普通」とする先生たちは、きっとそう少なくはないのだ。
- 自分は、映画を見ていながら、「はぐルッポ」の山田幸江先生は、木村先生となんかとてもよく似ているなあとしきりに思った。山田先生は、木村先生と A・A”かもしれない。
- ・多忙を極める木村先生に西森さんが強引に無茶ぶりをして、今回の企画は実現できた（「ここなら」の皆さんの精力的な運営もすごかった）。その結果、8月31日は、「はぐルッポ」にとって、記念すべ一日になった。西森さんの強引さも、時には必要かもしれない。
 - ・今回も、蒼穹先生には大変お手数をかけてしまったが、先生は全く厭な顔1つせず、演題を書いてくれた。また、「(親の会の)丸山さんがいなければ、今回のことはできなかった、とてもありがたかった」と、西森さんは言う。2人の表現は異なるけれど、心の奥にあるものは、同じかもしれない (ありがとうございました)。

(斉藤)